

第3回トウキョウサンショウウオ シンポジウム

2001年2月24日(土)

東京都立川市 立川市高松公民館・視聴覚室
JR立川駅北口下車徒歩13分・立川市高松3-22-5 / 042-527-0014

トウキョウサンショウウオは、池や湧き水のたまりなどに産卵する止水性のサンショウウオで、近年多くの生物の生息地として注目される里山をおもなすみかとしています。かつては人間と自然が共生してきたこうした環境も、人間の生活が変わるにつれて大きく影響を受け、年々その生息地が狭められているのが現状です。日本には他にも11種の止水性サンショウウオが生息していますが、里山環境を生息地とするものも多く、その将来についても同様の問題が指摘されています。

私たちはサンショウウオに象徴される自然と人間が共生できる社会をめざして、昨年、一昨年とシンポジウムを開催してきましたが、今回は保全のための具体的な行動を考える場として、このシンポジウムを企画しました。

主催/トウキョウサンショウウオ研究会

東京都あきる野市平沢473-6 Tel&FAX 042-550-0265

<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~tamo/salamander/index.html>

プログラム

- | | | |
|-------|------|---|
| 13:30 | 開場 | |
| 13:55 | 開会 | |
| 14:00 | 講演 | 久保田 繁男(西多摩自然フォーラム代表)
「生物調査が支える里山保全運動—西多摩の事例から」 |
| | 報告 | 菊水 研二(北九州カスミサンショウウオを守る会)
「太陽電池式揚水ポンプを使った湧水の確保による生息地保全」 |
| | 報告 | 金田 正人(三浦半島自然史研究会)
「三浦半島の現状と保全の取り組み」 |
| | 講演 | 草野 保(東京都立大学理学部生物学教室)
「保全のためのガイドライン」 |
| 16:30 | 質疑応答 | |
| 16:45 | 閉会 | |

閉会後に開場を移して懇親会を予定しております。



第3回

トウキョウサンショウウオ・シンポジウム 2001年2月24日(土)

東京都立川市

立川市高松公民館・視聴覚室

JR立川駅北口下車徒歩13分・立川市高松3-22-5/TEL 042-527-0014

テーマ「サンショウウオを保全するには」

トウキョウサンショウウオは、池や湧き水のたまりなどに産卵する止水性のサンショウウオで、近年多くの生物の生息地として注目される里山をおもなすみかとしています。かつては人間と自然が共生してきたこうした環境も、人間の生活が変わるにつれて大きく影響を受け、年々その生息地が狭められているのが現状です。日本には他にも10種の止水性サンショウウオが生息していますが、里山環境を生息地とするものも多く、その将来についても同様の問題が指摘されています。

私たちはサンショウウオに脅かされる自然と人間が共生できる社会をめざして、昨年、一昨年とシンポジウムを開催してきましたが、今回は保全のための具体的な行動を考える場として、このシンポジウムを企画しました。

主催/トウキョウサンショウウオ研究会

東京都あきる野市平沢473-6 / tel & FAX 042-550-0265

<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~tamo/salamander/index.html>

プログラム

13:30 開場

13:55 開会

14:00 講演 久保田 繁男 (西多摩自然フォーラム代表)

「生物調査が支える里山保全運動—西多摩の事例から」

報告 菊水 研二 (北九州カスミサンショウウオを守る会)

「太陽電池式揚水ポンプを使った湧水の確保による生息地保全」

報告 金田 正人 (三浦半島自然史研究会)

「三浦半島の現状と保全の取り組み」

講演 草野 保 (東京都立大学理学部生物学教室)

「保全のためのガイドライン」

16:30 質疑応答

16:45 閉会 (閉会後に会場を移して懇親会を予定しております。)

生物調査が支える里山保全運動—西多摩の事例から

西多摩自然フォーラム 久保田繁男

あきる野市の横沢入りは、都内では貴重になった里山環境が残る地域として、多くの自然愛好家に知られてきた。ところがバブル期にJR東日本によって、この地域の60ヘクタールを住宅地として開発する計画が持ち上がり、多くの自然保護団体が反対運動を展開してきた。これが実って2000年9月、JRは計画を断念したが、これには生物調査が果たした役割も少なくない。

そもそも事の発端は、1989年9月、旧五日市町第3次長期総合計画で、横沢入を計画的に市街化を図る地域とし、JRを開発事業者として選定したことから始まっている。それまでは、三頭山に続く「都民の森」の第2号地の候補地として考えられていたものを、候補地を峠を越えた初後沢に変え、自然環境調査の欠落したままに、横沢入を3,000人の人口増を見込む住宅開発予定地としたボタンの掛け違いから出発している。

更に、アセスメント用の調査を行ったPコンサルの調査がずさんであったために、事業者としては、コンサルの当初の調査リストから漏れていたオオムラサキを始めとして、トウキョウサンショウウオ、ゲンジ・ヘイケボタル、ヤマトセンブリ、イチモジヒメヨトウ・カギモンハナオイアツバ等の昆虫類、猛禽類のオオタカ等、次々に生物関係の追加調査を余儀なくされることとなり、開発に関する東京都に対する手続きも、東京都自然保護条例等の関係から入口段階で先に進めないことになる。

西多摩自然フォーラムでは、アセス会社の調査レベルを上回る独自調査の結果に基づいて、1993年11月、「五日市町横沢入地区の自然環境の保全についての要望書」を、東京都及び五日市町長あてに提出した。ここでは、横沢入がオオタカの餌場となっていること、トウキョウサンショウウオの良好な生息地であること（←卵のう調査結果）、オオムラサキが生息し保全が必要なこと（←エノキの毎木調査による越冬幼虫調査結果）、ゲンジ・ヘイケボタルの大発生地であり保全が必要なこと、サラサヤンマ・モートンイトトンボ等の希少なトンボ類が生息していること、また、草堂ノ入を残存緑地とする五日市町の計画ではこれらは保全できず、中央部の休耕田・水田、東側の谷戸の保全が必要なことを提起した。

こうして、JRが組織する、当フォーラムも加わる委員会が設けられることになる。

①1994.5~1995.1 五日市町横沢入地区自然環境調査検討委員会

この期間、併行して、里山昆虫研究会による精力的な調査が行われ、国内唯一の残存生息地となるヤマトセンブリの発見、イチモジヒメヨトウ・カギモンハナオイアツバ等の全

国的にも希少な昆虫が発見され、1995年には「多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究」としてまとめられる。

②1995.8～1995.12 五日市町横沢入地区土地利用検討委員会

中央湿地部の取扱いをめぐって玉虫色のまとめとなったが、その後1996年秋、尾崎氏により横沢入隣接地域でオオタカ営巣木が発見され、この調査と保全の問題が12月の都議会でも問題になる。

③1997.7～1998.11 横沢入地域オオタカ保護方策検討会

横沢入オオタカ調査プロジェクトが作られ、事業者の調査と併行して独自調査が進められ、この調査結果は検討会のまとめにも反映される。

今回のマスコミ報道にもあるとおり、1995年の土地利用検討委員会の報告書は大きな転機となるものであった。中央湿地の取扱いについて玉虫色の表現になっているが、「自然環境の保全」と「採算性の採れる開発」との軋みがぎりぎりのところで、調整できないことを表現するものとなった。更に、その後、オオタカ保護方策検討会の報告によって保全エリアが広がることにより、「採算の採れる開発」が最終的に不可能になったものである。

因みに、通常「採算の採れる開発」とは、用地の3分の1の造成平場を確保できるかどうかの一つの目安になるとされている。横沢入の場合には、20ヘクタールの造成平場を確保できるかどうかということになる。20ヘクタールの造成平場を確保するためには、山を削り中央湿地を埋め立てるしかない。これでは、環境と調整の取れた開発は不可能とならざるを得ない。中央湿地に最大の特徴を持つ横沢入の自然の核心部をつぶす開発計画に対して、横沢入に関わる市民団体や都民からの批判の声は次第に大きくなってきた。JR、あきる野市や東京都にも直接に数多くの批判や意見が寄せられるようになってきた。

また、東京都の人口も横ばいで推移し、新たな住宅開発の公共的な必要性も薄れてきた。都の秋留台地域整備計画も人口フレームから見直しが行われる見込みであり、丘陵部の宅地開発は計画から外れることは必至の情勢となってきた。バブルの崩壊によつて土地・住宅の販売も落ち込む中で、JRが遅ればせながらも計画の断念を決意したことは懸命な判断といえるものであろう。

「太陽電池式揚水ポンプを使った湧水の確保による生息地保全」

北九州カスミサンショウウオを守る会 菊水研二

私の現在所属している「北九州カスミサンショウウオを守る会」は、1994年12月北九州市若松区に計画されている学術研究都市建設に対して「カスミサンショウウオの保護対策をとってほしい」という意見書を提出するところからスタートしました。そして1997年、九州大学統合移転予定地内でのカスミサンショウウオの生息調査を依頼されたことをきっかけに、当地福岡市西区元岡地区でのカスミサンショウウオ生息地保全対策が始まりました。

カスミサンショウウオは、トウキョウサンショウウオと同じHynobius属に属し、西日本一帯に広く分布しています。しかし生息地が里山ということもあって、近年里山の消失とともに各地でその姿を消しているようです。

九州大学では当初の計画では埋め立てられる予定であった谷部の保護・緑地の保全・湧水の確保に乗り出し、担当教授陣や学生等による生物調査や地元のボランティアによる緑地管理を導入。カスミサンショウウオの産卵地であった場所全体を「生物多様性ゾーン」と位置づけ、現在、太陽電池式揚水ポンプを使った湧水の確保による生息地保全が行われています。

トウキョウサンショウウオの観察と生息調査のご案内

1993年以来行なってきた調査ですが、毎年新たな発見があって、トウキョウサンショウウオの生態もなかなか一筋縄ではいきません。去年は産卵が遅れて、成体が多数観察されましたが今年はどうでしょうか。初めての方でも気軽に参加できる調査です。

- 調査域 東京都青梅市・あきる野市・日の出町の秋留台地域丘陵部
- 日時 3月31日(土)雨天の場合 4月7日(土)
- 集合 A. 青梅区域 JR青梅線小作(おざく)駅西口
B. 五日市区域 JR五日市線武蔵増戸(むさしまずこ)駅前
C. 日の出区域 JR五日市線武蔵引田(むさしひきだ)駅前
いずれも午前9時30分
- 内容 トウキョウサンショウウオの産卵地を探し、親や卵のうの数・生息環境などを観察し、所定の用紙に記録します。調べたデータは生息地保全に活用されます。
- 参加費 一人300円・ファミリー500円
- 持ち物 弁当・水筒・ゴミ袋・筆記用具・必ず長靴(泥まみれの人が毎年出ます!)・タオル・あれば炊事用ゴム手袋
- 注意 小雨決行・採集は認めません。ご理解ご協力をお願いします。参加申込不要・解散は現地午後3時ごろ(変更の場合あり)
- 問合せ 川上 042-550-0265
- 主催 西多摩自然フォーラム/代表・久保田繁男/青梅市日向和田2-310-3

トウキョウサンショウウオとは

体長10センチほどの小型のサンショウウオで、東京の西多摩郡多西村草花で発見され、1931年、トウキョウサンショウウオ *Hynobius tokyoensis*と命名されました。

群馬県を除く関東地方の一部に生息し、都内では東村山、東大和、武蔵村山、瑞穂、青梅、あきる野、日の出、八王子、日野の7市2町で見つかっています。

夜行性のうえ、丘陵地の雑木林の落ち葉の下にすんでいるため、姿が見られることはめったにありませんが、2月から4月にかけての産卵期には、流れのない水たまりに集まって、バナナのような形のゼリー状の卵を産むので見つけることができます。

ふ化した卵は小魚のような幼生となり、やがて足が生えて変態し、5カ月ほどで上陸します。親になるには4～5年かかるといわれています。

東京都内のトウキョウサンショウウオは、すみかとなる丘陵地の自然が開発によってつぎつぎと失われてきたため、絶滅してしまうのではないかと心配されています。そのため「保護に留意すべき地域個体群」として環境庁のレッドデータブック（日本の絶滅の恐れのある動植物のリスト）に掲載されています。

トウキョウサンショウウオ研究会

東京都内のトウキョウサンショウウオは、絶滅が心配されていながら、1979年以来20年近くにわたって全域の調査が行なわれず、全体の数や生息地の状態をつかむことができませんでした。

しかしその間も、関心を持つ人々によって各地で調査は続けられており、1998年、環境庁による「種の多様性調査」への参加をきっかけに、西多摩自然フォーラム・トウキョウサンショウウオを守る由木の会・丘陵のトウキョウサンショウウオを守る会・川口の自然を守る会・むささびの会などの団体や市民・研究者が連絡をとりあい、都内の生息状況の把握を目的とした「トウキョウサンショウウオ探検隊」が結成されました。

その後「探検隊」は、生息環境の保全まで視野に入れた「研究会」に発展し、月例会の開催、都内の生息状況調査、生息地保全のための方法論の蓄積と実践、各地の研究者・団体との情報交換、ニュースレターの発行などの活動を行なっています。

1999年秋には、これまでの調査をもとに「トウキョウサンショウウオは生き残れるか？—東京都多摩地区における調査報告書—草野保／川上洋一・編著」を発行しました。

また、1999年より開催している「トウキョウサンショウウオ・シンポジウム」は、本種に限らず日本の止水性サンショウウオの抱える保全についての諸問題を考える場として定着してきました。

トウキョウサンショウウオとその生息環境の保全に興味をお持ちの方であれば、どなたでも参加できます。詳しくは事務局、または研究会ホームページまで。

●事務局／〒197-0812 東京都あきる野市平沢473-6 / TEL&FAX 042-550-0265 / 川上方
<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~tamo/salamander/index.html>

「三浦半島の現状と保全の取り組み」

KANEDA, M. 2001, Feb.

三浦半島の現状

生息の現状・把握の現状

他地域と変わらず、神奈川県のとウキョウサンショウウオは、とつても危機的な状況。生息個体数は、全島あわせても1000個体程度。さらに生息地がそれぞれ分断されています。極めて危機的な状況です。

三浦半島では古くから、トウキョウサンショウウオが生息していることは知られていましたが、詳細の分布は解りませんでしたので、1997年に全島調査を行いました。(参照添付資料)

ただし、調査での確認漏れなどもあり、後になって新たに分布が見つかった場所が1ヶ所あったり、報告で分布しているとしたものの、その後も生息が確認されていない場所もあります。

1998年以降は、1997年調査者を中心にそれぞれの地域を分担して任意で調べ、電子メールなどで情報交換しています。

危機の状況

【開発などによる生息地の消失】

産業廃棄物処分場、流通センター、県道・市道、ほか ミニ開発など

【耕作放棄などによる生息環境の悪化】

水田や雑木林などが放棄され荒地化したために、産卵池が消失しています。また、相関関係は明らかではありませんが、樹林地が荒れているところでは、成体の採食対象となるヒメワラジムシなどがあまり見られません。そうしたところ付近の産卵池で未成熟卵、死卵などが目立つような印象があります。

【移出入による遺伝子の攪乱】

善意で(?)サンショウウオを他の半島内外の他の地域から持ち込んだり、他の地域へ持ち出す人が後を絶ちません。幾人かについては把握しており、なんども説明しているのですが、理解してもらえずにいます。

【乱獲(密猟)や、新たな捕食者】

いくつかの生息地で、明らかに人為的な採集と思われる卵塊の消失が目立ちました。また、最近移入され分布を広げているアライグマの被害も心配。

保全の取り組み

普及活動

自然かんさつ会、シンポなどの他、2002年からの総合教育課程でのチャンスを利用。

ボトムアップの試み

いくつかの生息地では卵囊を回収、亜成体（または幼生）になるまで飼育し、再放逐することを試みました（1998～）。飼育には、観察会で関心を持った方からも「飼ってみたい」との要望が高まっており、数名には対応しました。

産卵地確保の試み

乾地化が心配される荒廃地で、産卵のための池堀を行ない、掘った場所に産卵に来るようになったところもありました。市民グループでの水田耕作活動への関心の高まりから、様々な地域で地主さんから里山管理や水辺の確保などのために土地を利用させてもらう活動もはじめました。

緊急事態？ 山中町のサンショウウオ

半島内で1、2を競う個体数が生息している山中町で流通センター（トラック集荷基地のようなもの）の開発計画があります。環境アセスメントの最中ですが、保全計画は、適切なものとは考えられません。

この開発計画について保全計画を検討・提言することを契機にトウキョウサンショウウオの保全に前向きな開発のあり方を市民、行政、事業者と共に考えていきたいと思っています。

シンポジウムを開催します。

「三浦半島トウキョウサンショウウオ・シンポジウム
～保全と開発の共存をさぐる～」

日時：2001年3月11日（日） 13時～16時半

※閉会后、懇親会（有料）を予定しています。

場所：横須賀総合福祉会館（横須賀市、JR汐入駅そば）

定員：25名 参加費：無料 参加申込：不要

主催：三浦半島自然誌研究会・三浦半島かんきょうフォーラム

問合せ：「三浦半島かんきょうフォーラム」事務局

〒240-0101 神奈川県横須賀市長坂3-40-14 三留方

0468-56-5698 Fax 0468-56-8684

「三浦半島自然誌研究会」事務局 金田 正人

〒240-0113 葉山町長柄1182-3

kndmst@ka2.so-net.ne.jp 090-4254-5003